

人 口

明治8年に1 050 060人であつた本県人口は、その後、増加の一途をたどつて第1回国勢調査の行われた大正9年には、1 336 155人となつた。そして、この増加は現在も止まることなく昭和30年国勢調査では、2 205 060人となり、遂に220万人を突破する結果となつて現われている。

しかしながら、この間昭和24年に主要都市への転入制限が解除されて以来、自然増加の減少と相俟つて、人口の増加はやゝ緩慢となつた。特に一時的であるが昭和25年は、昭和23年より人口が減少した年であつた。

住民登録による転入、転出を加除すると、昭和29年には11 157人、昭和30年には2 367人の人々が県外へ転出している。これは東京、神奈川という大きな労働市場と隣接する、本県の地理的条件によるものと考えられる。

また、人口動態からみると、終戦直後異状に上昇した出生率も、最近では正常に復し、むしろ戦前よりも低くなり、増加する人口にも終えんの期が来るかにみえたが、一方、医療技術の急速な発達によつて、死亡率も極めて低くなり、戦前の $\frac{1}{2}$ となつた。従つて出生、死亡による人口の自然増加は、近年低くなつたとはいへ明治・大正期はもとより、昭和初期よりも高いのである。

これらのことから、当分の間は、転入、転出の社会移動で人口は減つても、それ以上の自然増加のため本県人口はぼう張するものと、考えられる。

人口密度からみると、明治初年1平方料当り208人程度であつたが、大正9年には264人、昭和30年には439人と遂に倍増し、大正9年には全国都道府県中第13位であつたのが、昭和30年には一躍第8位になつている。

本県人口の就業状態をみると、昭和30年国勢調査では第1次産業に55.8%が就業し、第2次産業14.1%、第3次産業は30.1%となつており、依然、本県が農業県であることを示している。併し乍らそれでも、昭和25年の第1次産業63.2%、第2次産業12.0%、第3次産業24.8%、大正9年の第1次産業69.6%、第2次産業9.8%、第3次産業19.2%であつたことと較べると、本県も、漸く原始産業県から脱けだし、近代的産業構成県への歩を踏み出した努力がみられる。